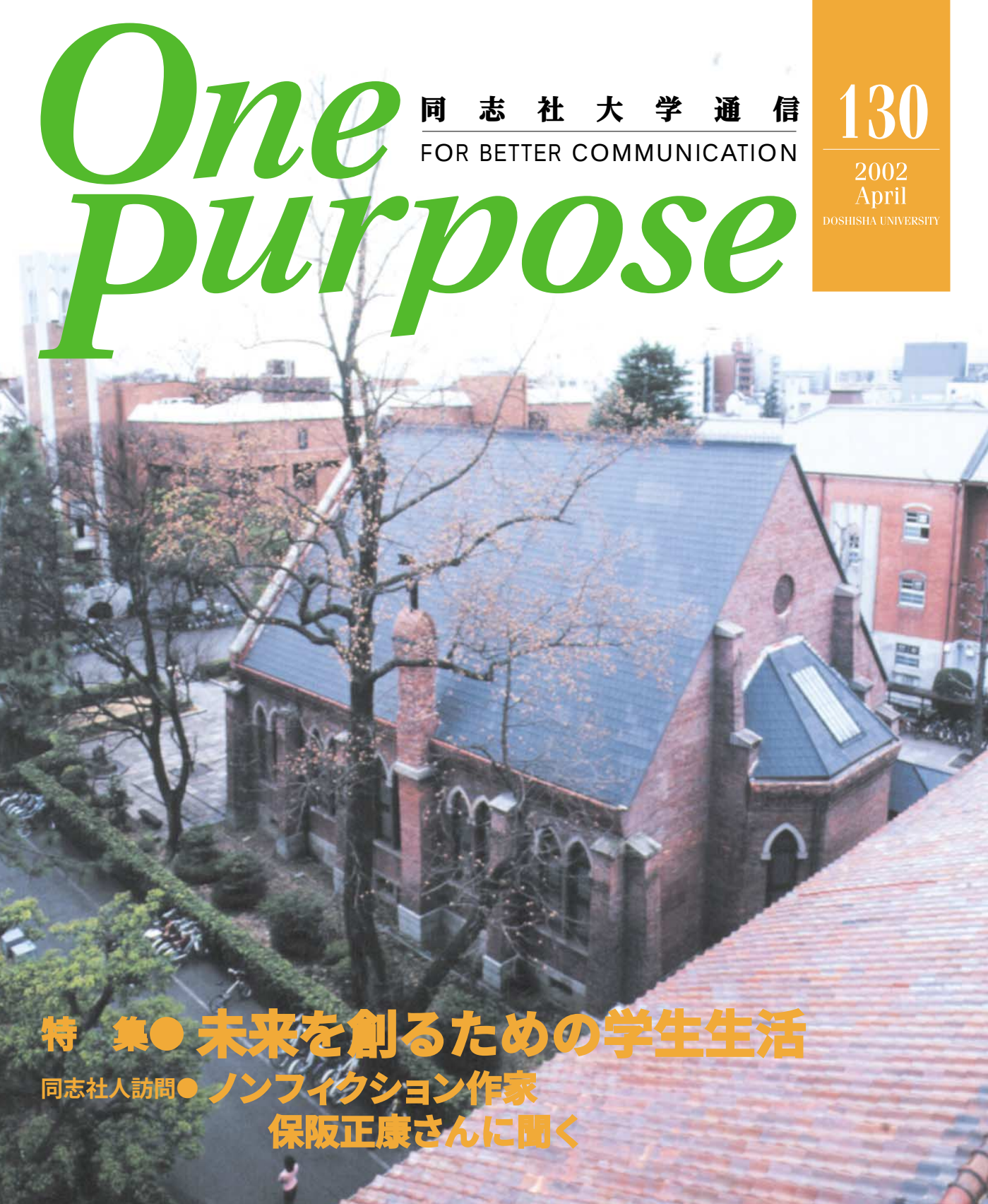
One purpose

同志社大学通信

FOR BETTER COMMUNICATION

130
2002
April
DOSHISHA UNIVERSITY



特　集● 未来を創るための学生生活

同志社人訪問● ノンフィクション作家 保阪正康さんに聞く

CONTENTS

No.130 | 2002 | APRIL

特　集　～座談会～

未来を創るための学生生活

2

CAMPUS NEWS（1）

京田辺校地 ～京田辺校地情報メディア施設
今出川校地 ～集いと学究の新空間　7

INTERVIEW ～同志社人訪問～

ノンフィクション作家 保阪正康さんに聞く　9

CAMPUS NEWS（2）

・京田辺市民とともに、地域通貨『きゅう』の発行をめざす!
・「書道部二人展」が明徳館ラウンジで開催される
・アフガニスタン難民を支援する音楽CD『ワタシ流イマジン』を制作　12

卒業生通信

・土佐ノ海関、大碇関。早春の今出川キャンパスを楽しむ　14
土佐ノ海関（1994年商学部卒業）　大碇関（1995年商学部卒業）
・“ 第一期生 ”づくしの職業人生を振り返る
陣原壽明さん（1979年法学部 政治学科卒業）
・ソルトレーク冬季五輪に本学卒業生が出場!
工藤博さん（1997年商学部卒業）
・地球の反対側でボランティア
光長功人さん（1989年工学部 機械工学科卒業）

ANNOUNCEMENT

フレッシュマンキャンプ、ふらっとプログラム、@プログラム、アッセンブリーアワー、函館キャンプ、春学期奨学生募集と学費の延納・分納について、医療費等援助基金について、学生教育研究災害傷害保険について、第25回外国文化週間、新任教員紹介、退職教員紹介、証明手数料の改定について　18

ゼミ・ぜみ おじゃまします

疑似ミニ・プロフィットセンター（MPC）のケース研究　21

OP COMMENTARY

水島二郎 工学部教授　京都から発進する大学モデルの未来形　23

BOOK

橋本滋男 神学部教授　『春になったら苺を摘みに』 異質な人々を受け容れる心　24

MY JOB,MY LIFE ～私と仕事～

・戸田敦子さん（1993年文学部 社会学科卒業）
・塚本信二さん（1993年文学部 文化学科卒業）　25

COVER STORY
〔表紙の情景〕

写真は、2000年春に改修された扶桑館の5階、西側にあるラウンジの窓から礼拝堂を撮らえたもの。扶桑館は、かつて工学部の機械系・化学系の実験棟として使用されてきたが、改修後は高度情報化時代に対応した施設に変貌した。最上階にあたる5階は、商学部・商学研究科が使用、ラウンジはそのゼミの打ち合わせなどでよく使うという。この景色を紹介してくれた西川洋祐さん（商学部4年次生）は、「明徳館のラウンジが混雑しているときは、こちらを利用します。静かですから、資格対策の自習室として使っている人も見かけます。どちらかと言えば、静寂を大切にした人にだけ来て欲しいスペースですね」と話してくれた。窓からは、正面に明徳館や図書館が望めるほか、礼拝堂やハリス理化学館など国の重要文化財が眼下に眺められ、今出川キャンパスらしさを知ることができる隠れたスポット。夜になれば、ライトアップされた明徳館の塔が美しく浮かびあがり、幻想的な気分に浸れるそうだ。

「撮影スポット」を募集中!

『One Purpose』の表紙を飾る写真の撮影場所を募集しています。普段見慣れたキャンパスも、「こんな所から見ると違った表情を見せてくれる」。そんなスポットがあったら、ぜひご推薦ください。

[連絡先]
企画部広報課『One Purpose』係まで
TEL　：075-251-3120
E-Mail：ji-koho@mail.doshisha.ac.jp

未来を創るための学生生活

DISCUSSION

●特　集／座談会

多難な時代をどう生きるか-----これは、不況下にあえぐ日本社会や企業だけに課された問題ではなく、私たち一人ひとりに突きつけられた問題である。二十世紀のパラダイムが崩れつつある現在、これから社会に飛び出す学生の皆さんの中には、羅針盤なしに航海に出るような不安を抱いている人も多いかもしれない。今回の特集は、時代の移り変わりをそれぞれの立場から体験してきた人生の先輩たちにご出席いただき、よりよい未来を生きるために、学生生活をどのように過ごしたらよいかを話し合ってもらった。

三森　定道
工学部教授

山田　礼子
文学部助教授

大野　長八
株式会社ベンチャー・リンク
監査役

神谷　雄續
就職部長
〈司会〉

学生時代に見つける自分らしい生き方

司会◆人間の生涯を七十五年としますと、職業生活はその約六割を占めることになります。まさに人生の根幹だと言えると思います。学生生活はその基盤を作る大切な時期です。今日ご出席いただいた皆さんは、それぞれの分野においてご自身の手でキャリアを切り開いて来られた方々で、これから学生諸君を待ち受ける激動の時代に良きアドバイスがいただけるのではないかと思います。自己紹介をかねて、この大切な学生時代をどのように過ごされ、そしてその後の人生にどうつながっていったのかお話しください。

大野◆父は大手商社で働いていましたが、独立して会社を起こしました。ですが国策により大企業に吸収合併されました。そういう父の生き方が私の職業観に大きな影響を与えたように思います。と言うのは、将来を考えるときは、つねに子供の頃に父の職場に連れていかれたことを思い浮かべ、もし自分が父の会社の良き役員になるにはどうしたらいいかを考えてきたからです。ところが同志社大学に入り、海外の友人を通して米国には経営コンサルティングという極めてステイタスの高い職業があることを知るに及んで、私の関心は優れた経営者になることから、経営者を育成するコンサルティングという職業へと移っていきました。そんなこともあって大学は法学部でしたが、卒業後、経理学校で一年間会計を学んだ後、経営コンサルタントの道に入りました。現在は、ベンチャー企業、㈱ベンチャー・リンクの役員を務めるかたわら、ベンチャー企業の経営支援や人材開発を行っています。

山田◆私の学生時代は、オイルショックの不況下にあり、先輩たちの中には就職は決まっても自宅待機を強いられた方がかなりいらっしゃいました。そんな中、私は漠然とではありますが、結婚しても職業人として生きていこう、と考えるようになっていました。幸い、外資系銀行に就職が決まりました。外資系は給与がいい半面とてもクールで、入社の翌年には四十歳以上の管理職を対象に大規模なリストラが行われました。この厳しい現実を前に、私は「頼れるのは自分しかない」と思うようになりました。銀行には八年勤務し、この間、結婚、出産を経験。さらに夫の海外赴任を機に、UCLAの大学院に留学することもできました。会社で人材育成を担当していたこともあり、教育社会学、比較教育学を学びました。授業は社会人入学の方も多く、理論と実践の両面からとても楽しいものでした。帰国後は、PHP研究所勤務を経て、教員の道を歩みはじめ、現在に至っています。大学卒業後もずっと続けてきたことが、今日につながっているのだと思います。

三森◆私は学者の家庭に育ちました。父は民俗学者でしたが、戦後は教職に就けず、自由業

的な仕事で家計を支えていました。当然生活は不安定で苦しいものでした。そんな環境に育ったこともあって、いつしか周囲に流されず主体的な生き方を選ぶようになりました。

大学は京都大学の工学部に進み、博士課程を修了しました。周囲は大学で研究生活を続けるものと思っていたようですが、もっとオリジナルな仕事がしたいと考え、日立製作所に入社しました。京都大学OBの常務に「日立は中小企業の集まりのようなものだ。各部署で製造している製品をコンピュータで繋げば、大企業に相応しい製品ができる」と主張しました。常務は「自分の部下で同じことを言っているのがいる。その部下の下に配属したいが、博士過程を出ているのなら」と、中央研究所に配属してくれました。研究所に入って何をしたかと言いますと、実は研究所にはあまり顔を出さず、お客様回りをしていました(笑)。お客様に接し、ニーズを発掘し、お客様の声を生かした商品開発に専念してきました。そんな生活をしていたおかげで、社内では営業マンと研究者という二つの三森像ができてしまいました。

司会◆学生時代に、特に力を入れていたことはありますか。

大野◆クラブ活動ですね。同志社学生放送局での活動が学生生活で大きなウエイトを占めていました。一年次にはハーバード大学やラドクリフ大学のグリークラブが来演したので、合同ダンスパーティーなど楽しい思い出がいっぱいあります。しかし、二年次になるとキャンパスは学生運動一色になりました。放送局も学友会傘下の団体ですから、応援は積極的にしましたが行動より自分と向き合う時間を大切にしたかったし、現代史の中で自分を捉え直そうとしていました。その一方で、国際交流というか、異文化理解に力を入れていました。中学、高校でやってきた文通を通して、海外に多くの友人ができ、そんな中から経営コンサルタントという職業を知ったわけです。

三森◆研究室に持ち込んだ書籍を見ると皆さんびっくりされるんですが、文科系の本がいっぱい並んでいます。大学では電気工学を専攻しましたが、ジャンルにこだわらずに勉強しました。思い起こすと、小学校三年の頃、戦争から復員された先生が時間をもて余して何かおもちゃのようなものを作っておられる。私もそれを見よう見まねで作っていく。でき上がったものが変圧器だったりするわけで、それが後の電気工学の研究につながりました。一方、山歩きの好きな先生に連れられ山へ行き、自然地理の手ほどきを受けましたし、文学好きの先生に導かれて文学にも夢中になりました。目の前の見えるものが面白かった。そんな気持ちでいましたから、学問のジャンルには生来興味がなかったのでしょうね。

山田◆私も三森先生のように、勉強とは包括的なものだという教育を受けてきたので、できるだけ幅広い知識を身につけようとしてきました。

司会◆ところが、最近の学生を見ていると、好きなことは一生懸命やるが、それ以外のことには余り興味を示しませんね。

大野◆私はそれでいいと思いますよ。好きなことをやり、その好きなことが将来社会的な評価を得て、収入が得られればいいのです。仕事上、私はよく深夜まで働きました。土日もいやがらず出勤しました。それは経営コンサルティングという仕事が好きだからできるのです。嫌いなことを無理にやるのは体にも悪いでしょう。

三森◆そうでしょうか。たとえば、「知」には三つの階層があります。知識、知恵、そして知性ですね。私たちは学んだ知識を使って、知性を高めていくわけです。その過程で好きなものも変わっていきます。極端に言えば、本当に好きだったことは一生を終えるときに分かるものだと思います。

より広い視野に立ったキャリア設計を考える

山田◆好きなことしかやらないというお話ですが、私は逆に最近の学生は器用というか、損得勘定を優先させている印象を持っていま

大野　長八

【株式会社ベンチャー・リンク　監査役】

Ohno Chohachi

1948年大阪府生まれ。71年同志社大学法学部法律学科卒業。株式会社日本エル・シー・エー取締役、株式会社ベンチャー・リンク常務取締役、リンク・インベストメント株式会社取締役社長を歴任するとともに、近畿経済産業局主催の「関西ベンチャー企業育成懇談会」等で、若手起業家の育成や中小企業の支援指導に取り組む。

三森　定道

【工学部教授】

Mitsumori Sadamichi

1966年京都大学博士過程（電子工学）修了後、（株）日立製作所に入社し、中央研究所、システムの開発研究所に勤務。1994年から同志社大学。電気学会では、電子・情報システム部門の部門誌編集長と部門長を歴任、現在、情報システム技術委員会委員長。An Editor of The Journal of "The International Council on Systems Engineering". 1989年に科学技術庁長官賞（研究功績者表彰）、1997年に電気学会業績賞を受賞。

す。勉強慣れしているからでしょうが、「これは試験に出ないからいらない」とすぐに判断してしまうのです。しかし、学問というのは本来、目先のことだけで判断すべきものではありませんね。私は大学ではＥＳＳに入っていました。ＥＳＳというのはやはり英文学科の人が多く、こと英語に関しては私は劣等生だったと思います。しかし、論理的に物事を考えるとか、いわゆる英語表現以前のベーシックなものを大切にしていたのでＵＣＬＡに留学したときにとても役立ちました。

三森◆なぜ今の学生が包括的な知識に興味を示さないのか。これは現代史を知らないことが一因になっているのではないでしょうか。過去の歴史は確かに知識として知っている。ただ歴史と自分とをつなぐ現代史については学んでこなかったから、問題意識がわいてこない。したがって、試験だとか資格だとかの目先の価値のみで知を判断してしまうのです。これは戦後の教育にも問題があって、現代を学ぶということは、冷戦構造下ではどちらかに組みすることになるので、意図的に避けてきたという面があるように思います。

司会◆最近の学生はすぐ損得勘定で考えるというのはまさにその通りで、「就職ガイダンスに出席すればどんな得があるんですか」と聞きに来る。何が得なのかは、自分がその情報をどう生かすかにかかっているはずなのですが。

三森◆私のところにある学生が就職の相談に来ました。「先生、どんな会社がいいと思いますか？」。ご両親の心配そうな顔が浮かんだので、「そうだね、この会社なんかいいと思う」と推薦しました。「その会社は大丈夫でしょうか？」と尋ねるので、「十年は大丈夫です。十年あればあなたは学ぶべきものをほとんど学べる。逆にあなたの力では、十年間ほどはどこの会社に行っても提供できるものはほとんどないでしょう」と答えました。すると「十年後は？」と聞くので、「あなたが入ったために倒産するかもしれませんね」と皮肉を込めて答えておきました。要するに考え過ぎなのです。どの会社に入るかは大切なことです。しかし、思い切って飛び込んでみて、選択が失敗だったと思わないように頑張ろうという意欲がもっと大切だと思います。

司会◆このことは重要で、学生にぜひ考えて欲しいことですね。以前、日本経済新聞社が企業の寿命三十年説を唱えて話題になりました。ところが、三年前、今度は『日経ビジネス』が米国と同じ計算法を使って五年という寿命をはじき出しました。どのような巨大企業でも隆盛期は数年しかないのです。ということは、いくら安定を志向しても企業の方が変わっていく。だからこそ会社に隷属するのではなく、能動的につねに自分自身のコア・コンピタンスを高め、変化に備えて欲しいと思うのです。それには持続力も必要です。山田先生は、三度転職されていますが、その点はいかがでしょう。

山田◆大学で社会学を専攻したのはジャーナリストを志していたからです。社会や政治に強い関心を持っていましたし、アフリカやアジアを取材して世界の現状を知りたかった。と

山田　礼子

【文学部助教授】

Yamada Reiko

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）教育学大学院博士過程修了（Ph.D）。PHP総合研究所主任研究員、プール学院大学国際文化学部助教授を経て現職。『プロフェッショナルスクール―アメリカの専門職養成―』（1998年、玉川大学出版部）、『社会人のための大学院案内』（1997年、PHP研究所）、『生涯学習時代における大学の戦略―ポスト生涯学習社会に向けて』（1999年、ナカニシヤ出版）他著書多数。

ころが、今と違ってジェンダーについて語られる環境にはなかったし、女性がその道に進むのはかなり大変なことでした。ただUCLAの大学院で学んだことも、教育社会学ですし、開発社会学についても勉強しましたので、社会学へのこだわりという点では一貫していましたし、銀行時代も含めて勉強は続けていました。持続力の大切さという点ではおっしゃる通りだと思います。ただ学者になるとは思ってもいませんでしたが(笑)。

大野◆マックス・ウェーバーは『職業としての政治』という著書の中で、政治家に必要な資質として情熱と責任感と判断力を挙げています。情熱とは持続力だと思うし、先程議論になった「好きなこと」にも通じるものだと思います。責任感とは社会や組織に対する使命感であり、どんなに「好きなこと」でも社会に貢献できなければ評価は得られません。判断力とは問題を把握する能力であり、正しい判断を下すために必要な情報を収集する能力です。これらは政治家だけでなく、管理職あるいはあらゆる職業人に求められる能力だと言っていいと思います。

職業人としての将来と大学での学びの在り方

司会◆ここに『二〇〇〇年度版経済白書』に掲載された「職業生活において重要な能力と大学で身につけた能力」というアンケート結果があります。これを見ると、判断力、コミュニケーション能力、問題解決能力といったいわゆる自己表現能力とともに、幅広い教養が今後ますます重要になると三十代前半のビジネスマンは考えているようで、大学教育にとっても示唆に富んだ結果になっています。

三森◆これは重要な問題を提起していると思いますね。博士課程後期は別にしても、私たちの教える学生の九割は企業人としての道を歩む人たちであり、アンケートでいうと「判断力」「コミュニケーション力」といった項目を必要としている訳です。ところが私たちは、知識だけを教えようとしてきたきらいがあります。これは大学だけでなく日本の教育の在り方の問題であり、何か間違った方向に社会を動かしてきたのではないかと危惧しています。

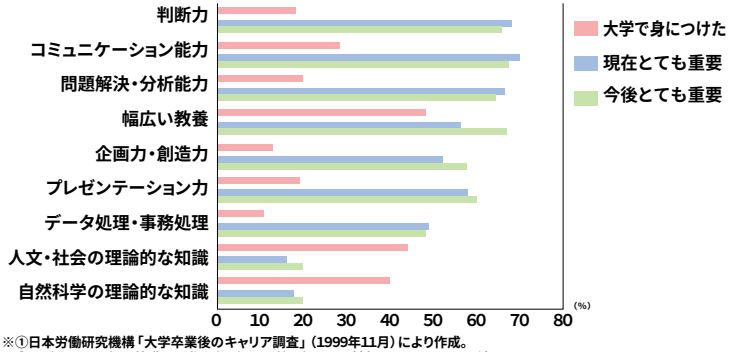
司会◆日本の文科系学生は、将来の職業生活を考えて大学を選ぶ学生は少数派です。多くは偏差値で選ぶ。逆に米国の学生は、将来の職業を考えて大学を選びます。山田先生、これは米国では小さな時からキャリア教育が行き届いているからでしょうか。

山田◆キャリア教育というよりもっと総合的なもので、それは幼稚園から始まります。"Show & Tell"という時間があって、三歳半になったら園児たちはウイークエンドにやったことをみんなの前で発表させられるのです。先生は子供たちの発表に応じて励ましの声をかけ、自尊心を育てていきます。こうして米国人は、判断力、想像力、問題発見と解決能力、プレゼンテーション能力などを培っていくわけです。これは良い面であり、米国人の唯我独尊的という悪い面の原因にもなっているのですが、しかし現在の日本で必要とされているのはまさにこうした教育であり、どうやって取り入れていくかがようやく議論され始めました。

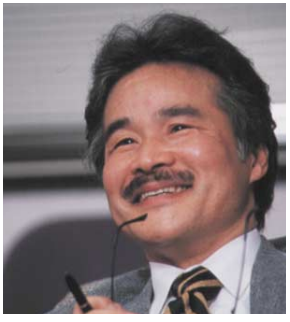
司会◆大学での勉強は、社会では必ずしも役に立たないという声もありますが。

大野◆目的を持って四年間を過ごした学生は、社会に出ても立派に通用します。ただ企業の側にも問題があって、先日もある会社で「貴社では、どんな能力を身に付ければ役員になれるのですか?」と聞いたところ明確な返答はいただけなかった。こうした評価基準がなければ、目的意識を持った学生は入ってこないし、入ってきても能力をどう伸していったらいいのか分からないまま人材を眠らせてしまいます。ですから、私は学生諸君には会社に寄りかかって生きて欲しくないです。それよりも主体的に生きてきて、「自分は仕事を

■職業生活において重要な能力と大学で身につけた能力



※①日本労働研究機構「大学卒業後のキャリア調査」(1999年11月)により作成。
※② 89年から 91年に就職した世代(現在30代始め)の人を対象としたアンケート結果。



神谷　雄績
◆司会【本学就職部長】

通してこういう生き方をしたい」とはっきり言える人になってもらいたい。

三森◆文科系の学生の問題が出ましたので、理工系学生について企業サイドからの見方を紹介したい思います。これは以前調査して明らかになったことですが、学生は微分方程式は解ける。変微分方程式も、積分方程式も解ける。しかし、現実の問題に直面したとき、目的に沿って、余計なものは捨象し、方程式を作り上げることができないんです。つまり、現実への適用能力がない。この点に関して、企業側は相当苛立っています。

司会◆そういうお話を踏まえ、では学生はどうした学生生活を送ったらいいのでしょう。

大野◆たとえばハーバード大学と共同企画で番組を作るとかテレビ会議をするとか、もっと積極的に行動を起こすべきだと放送局の後輩にはアドバイスしています。海外の大学ともっと交流して、世界の現実を正しく認識すべきなんです。そういう国際交流は、今自分が学んでいるカリキュラムはこれでいいのか、キャリア設計をどうやっていくべきかなど、見つめ直すいいきっかけになります。インターンシップも、たとえばカリフォルニアの日系企業でやってみるなどチャレンジしてみるべきで、先輩たちと同じことをしていても、これからの激動の時代は生き抜けないと思います。

山田◆女性の立場から言いますと、成熟化社会にあっては、女性の就業率は上がって当たり前で、減ることはまず考えられません。したがって、ダブルインカムを前提にキャリア設計を考えないといけない時代だと思います。これは女性だけでなく、男性も共有すべき問題のはずですが、豊かな家庭に育ったせいか、どうも男子学生はお父さんが外で働き、家事はすべてお母さんがやっていくことを当然のこととして受け入れているようなのです。一方、女子学生はそういう父親に批判的ですから、大きなギャップが生じています。しかし、これからは家事や子育ての役割分担をお互いのキャリア設計の中でどこに位置づけるかを含めて、共生のライフプランを立てていかなければいけない時代だと思います。

三森◆同志社大学の学生は、知・徳・体のバランスのとれた学生が多いと思います。総じて人間関係というものが分かっていて、知育偏重の時代と異なり、これからはこのことが特に大切になってくると思います。

司会◆最後に、それでは同志社大学の学生は具体的にどのような学生生活を送ればいいのか、アドバイスを三つずつ挙げていただけませんか。

大野◆学生時代は、利害関係なしに人とつき合える貴重な期間です。その貴重な期間を生かすためにも、殻に閉じこもらず、広く国内外に友人を求めて欲しいですね。そしてその経験をもとに積極的に国際交流の場に出てください。ますますグローバル化する時代ですから、自分の活躍する場を国内だけに求めるのはもったいないと思います。そして国際社会で生きていくためには、しっかり自分を主張できなければいけません。その意味でも、学生時代は自分と向き合う時間を持ち、自分が何をしたいのか、何をもって社会に貢献できるのかを考えて欲しいと思います。

三森◆一つ目は、大野さんと同じでたくさん友人をつくることです。私は海外とは言いませんが、学部や学科を超えて、価値観や経験の異なる友人たちとの交遊を通して、広い視野を培って欲しいですね。二つ目は、学問を学問で終わらせないために、習得した知識と実社会との関係を理解することです。そして自分はどうすればその知識を使いこなせるか考えて欲しいですね。三つ目は、英会話をマスターすること。国際化が進むということもありますが、他言語の発想を知るという意味でも得るものは大きいと思います。

山田◆私も先生方と同じように、多種多様な人とつきあうことを一つ目に挙げたいと思います。年齢を超え、文化や言語を超えて、さまざまな人と交流して欲しい。二つ目は、学問書だけでなく幅広いジャンルの本を読むこと。本を読まないと体験からのみ語る狭い人間になってしまう危険性があります。三つ目はその裏返しですが、できるだけ何でも見てやろう、経験してやろうという気持ちで体験すること。本だけではこれも知識だけで語る狭い人間になってしまう危険性があります。

司会◆せっかくキリスト教を徳育の基本としている大学ですから、学生時代にキリスト教にも触れていただきたいと思いますね。今日は、ご多忙の中お集まりいただきありがとうございました。

京田辺校地 情報メディア施設

未来を志向する同志社メディア・フロンティア

同志社の新たなる千年紀に向けた情報メディア施設の概要がまとまり、二〇〇三年一〇月に完成をめざすことになった。

施設は二棟からなり、情報機器を活用した実践的教育の空間として利用する。二十一世紀の高度情報化時代に向けて、メディア・フロンティアの同志社を象徴する施設となることが期待される。

本施設は、京田辺校地の正門北側（現、門衛所・駐車場）三、五八一㎡の敷地に建設される予定で、同志社大学のほか、同志社諸学校も利用する法人施設（仮称）と大学施設（仮称）の二つの施設からなる。

〈法人施設〉は、情報発信、開発研究、交流を目的とし、階段状のオープン・テラス「劇場空間」、スタジオ機能、メディア・ラウンジ、プロジェクトルームなどを擁する地下一階、地上三階の建物となる。オープン・テラスの上方は大きな吹き抜け空間になっており、明るく開放的で、創造と交流にふさわしい環境を提供する。建物頂部は二つのグラスタワーで形成され、昼間はダイヤモンドのように輝き、夜間には室内からのライトアップで浮かび上がり、私たちを新しい時代へ導く羅針盤となる。

〈大学施設〉は、法人施設の北側に隣接し、メディア演習室や屋外テラスなどの共有スペースで結ばれたシームレスな環境を提供する。演習室や教室からなる施設は、正課授業での使用を目的とするが、最上階の遠隔講義室では今出川校地や他大学などと結んだ授業を可能にするなど、情報機器を駆使した授業に対応できるさまざまな工夫が施される予定。

この二つの情報施設は、ITの進展により生み出された情報技術を研究の場から教育の場に移し、メディア・リテラシー技術を駆使して、多彩で高度な展開を見せる情報時代に適応した人材を育成することをめざして計画が進められてきた。本学の建学の精神を、新しい時代に展開し、学びの「知的好奇心」を「知的探求心」に進化させる施設として完成が急がれている。

集いと学究の新空間

学生生活のコア・ゾーン誕生へ！

十月十九日の学生部長提案以来、調整が続いていた大学（学生）会館の新改築問題は、ヒアリング等を経て、十一月二十六日に学友会との話し合いにより合意が得られ、すでに「新町新別館」（仮称）建設に着手している。本館の新改築計画はいよいよ本格的に動き始めた。

新大学（学生）会館は七階建て。まず、地階に五つの通訳ブースをもつ千人収容の大ホール、百人規模のマルチ・メディア対応会議室、ミニ・シアター、ギャラリー、フィットネス・ジムなどが入る予定である。

一階烏丸通り側には、イートイン・ベーカリーやオープン・カフェなどのフード・サービスを備え、エントランスを入ると、メイン・ラウンジを中心にメディア・コーナー、リラクゼーション・スペース、学習室、オープン利用ミーティング・スペースなどが配される予定。同じく一階には学生の福利厚生を支える学生支援関係のオフィス、学外向けPRラウンジ、管理事務室等が整備される。

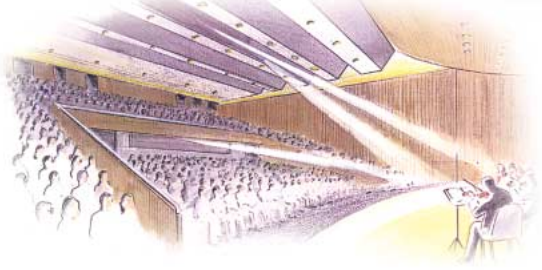
二階には、女子ラウンジ、中・小会議室などに加えて、就職部、厚生館保健センター等の学生生活に関わり深い事務部門が配置される。六階には、全学共用のマルチメディア対応や京田辺校地との遠隔会議室。最上階の七階には東山を一望するスカイレストランが入る予定。

これらの施設は、「会館のあり方についての答申」（詳細はhttp://www.doshisha.ac.jp/）を基本コンセプトとし、学生および学生団体の使用を念頭に置いている。昨年十二月のヒアリングの際に出された意見から、一階エントランスの池は芝生に変更、女子から特に要望の強かった女子ラウンジが追加された。威圧的だ、と批判のある外観（イメージ写真参照）も、提案より繊細なものへと設計変更する予定で、道路沿いには樹木による緑が配置される。飲食関係のテナントは現在業者を選定中で、内容変更の可能性も残る。

新会館全体の延床面積は一八、一一五㎡。現会館本館部分八、五〇〇㎡がそっくり収まり、残りのスペースとして二～五階に現在設置申請準備中の法科大学院（ロー・スクール）と経営大学院（ビジネス・スクール）が入る予定。二〇〇四年三月竣工予定。

最上階7階の
スカイレストラン

烏丸通り側の
オープン・カフェ



地階の1,000人
収容大ホール

ノンフィクション作家 保阪正康さんに聞く

菅野●保阪さんは近著『実学と虚学』で、〝学び〟について書かれていますが、〝学び〟の本質をどう捉えていらっしゃるのでしょう。

保阪●〝学び〟には、子供の頃に「勉強しないといけないですよ」と言われてやる〝学び〟と、気持ちがかき立てられて、自ら進んで行う〝学び〟の二つがあります。どちらも大切なのですが、自主的、能動的に学ぶのが本当の〝学び〟だと私は考えています。高校生までは受動的な〝学び〟がどうしても中心になります。授業に出席して先生の話を一生懸命に聞き、レポートを書きなさいと言われれば書くというように、与えられた課題の範囲内で学んでいきます。しかし、大学生になると能動的に学ぶ姿勢が求められます。ここまでは知っておかなければいけないという範囲がありますが、それを超えてもっと知りたいと思うようになる。つまり基礎学問を幅広く学んで、自分の関心の持てるテーマを見つけなければいけないのです。ですから大学では、能動的な〝学び〟と受動的な〝学び〟のどちらも必要だということになります。

菅野●保阪さんご自身は、学生時代あまり勉強されなかったと伺っています(笑)。

保阪●受動的な勉強という面では余りしませんでした。演劇研究会に入っていて、そちらに傾倒していました。演出を手がけ、創作劇を上演したりしていました。この研究会は歴史もあり、先輩も多かったし、随分活発に活動していました。ただ、私はでき上がった脚本や演出でやってもつまらなく感じる性分だったので、大学三年次生の時には、新入生を歓迎するために二時間くらいの創作劇を書きあげ、それを上演しました。それを見た新入生が多数入部してくれたので、とてもうれしかったことを覚えています。

菅野●演劇を通して能動的に勉強されていたということですよね。

保阪●そうなのですが、振り返ってみると、大学で学んだことは二割くらいで、あとの八割は社会に出てから学びました。これは私が悪いんですがね(笑)。今でも思い出すのが、第二外国語のフランス語の授業のことです。語学の習得に努力することがばからしく思えてきて、結局最終年次にまで単位を持ち越しました。ところが二年間のブランクの後に授業に出席したのでぜんぜん読めないんですね。そこで試験前にフランス語の最初の単語だけ覚え、あとに続く日本語訳は丸暗記をして臨みました。冷や汗をかきながら試験を受けている夢を今でも見ますよ(笑)。

菅野●新聞学の専攻でしたね。

保阪●私は北海道出身ですが、修学旅行で初めて京都を知り、いたく感銘して大学で学ぶならぜひ京都で、と決意しました。当時は、サルトルなど実存主義の影響が大きく、私も

保阪　正康さん

【1963年文学部社会学科新聞学専攻卒業】

Hosaka Masayasu

1939年北海道生まれ。同志社大学卒業後、出版社勤務を経てノンフィクション作家として活躍中。日本近代史、特に昭和史の実証的検証を追究し、歴史に埋もれた事件、人物のドキュメントを中心に執筆。立教大学の元講師、函館大学客員教授のほか、朝日カルチャーセンターで昭和史の講座を持つ。代表著書に、『昭和陸軍の研究(上下)』『東條英機と天皇の時代』『大学医学部の危機』『安楽死と尊厳死』他多数。2001年11月に刊行した『実学と虚学』(プレジデント社)がベストセラーになる。

INTERVIEW

ノンフィクション作家 保阪正康さんに聞く

仏文学が勉強したかったのですが、同志社大学には仏文科がありませんので、社会学科の新聞学を勉強することにしました。卒業論文では、藩の情報伝達のしくみについて書きました。「現代の地方紙のルーツは、幕藩体制下で各藩が行っていた情報活動にある」という仮説のもとに書いた論文で、担当教授にとても褒めていただきました。それから、入学当初はさほど関心がなかったのですが、同志社の創立者、新島襄に次第に関心を抱くようになり、関連図書はほとんど読破しましたね。なぜ国禁を破って渡航したのか、なぜ私学の創立が京都であったのかなど、吉田松陰の思想や行動と比べてとても興味をかきたてられました。

フランス語のように受動的な"学び"は苦手でしたが、能動的な勉強は結構やっていたのですね。しかし、社会に出てから受動的な"学び"をやってこなかったことを非常に後悔しました。

菅野●社会人になってから、国会図書館に通って勉強されたとお聞きしています。

保阪●卒業後は出版社で編集の仕事をしていたのですが、昭和という時代に興味を持ち始め、ノンフィクションで「昭和史」というジャンルを確立したいと考えるようになりました。ところが、私には二十代で当然知っておくべき知識や学問的手法が欠落していたのです。大学に入り直そうかとも考えましたが、すでに家庭を持っていましたので、家族に迷惑はかけられない。そこで定期券を買って毎日国会図書館に通い、三年かかって昭和史に関する図書や文献をすべて読みました。結果、戦争を挟んで生きた世代の体験を語り継いでいかなければならないという思いを強くし、今に至るまで、延べ四千人くらいの方にお会いし話を聞いて作品を書いてきました。

菅野●現在、大学で教壇に立たれていますが、教える立場になって、学生の学びの姿勢をどう感じですか。

保阪●学生時代は、教室内で昼寝している学生やおしゃべりしている学生がいてもさほど気になりませんが、教える側になると違います。やる気のある学生がいると、教壇にまでその熱が伝わってきますし、教える方も力が入ります。ところが、居眠りやおしゃべりは論外にしても、真面目なんだけど受動的でしかない学生からはそうした熱気が伝わってきません。

菅野●学生の立場から言いますと、高校生の頃は受け身の勉強を強いられ、大学に入ったからさあ能動的に勉強を!と言われ、どう自分を変えていけばいいのでしょう。

保阪●子供ではないんですから、自分で考えなければならないですね。自分がしたい勉強があるから大学に入った、あるいはそれを探そうと思って大学に来ているわけですから。ところが現実は、自分の学ぶテーマ、あるいは自分探しができない学生が増えているように感じます。それは、クラブ活動を見れば分かります。自分探しのできない学生が多い大学はクラブ活動も低調で、クラブ活動の活発な大学には、能動的に学ぼうという学生が多く見受けられます。

菅野●私は「同志社スポーツアトム」の記者をしていたのでお話はよく分かります。同志社大学は、活発に活動しているクラブが多く、そのうちいくつかは全国のトップレベルにあります。そういう活動をしている人に接すると、私たちもいい刺激を受けます。

保阪●それはいいことですね。運動系クラブをやっている人は、たとえばどうすれば自分は早く走れるようになるかを考え、トレーニング方法を考え、練習のプログラムを組み立てていく。卒業論文もそうした体験を通した

INTERVIEW

ノンフィクション作家 保阪正康さんに聞く

テーマで書く人が多いのではないでしょうか。ところが、自分のテーマを持たない学生は、問題意識もないから、時間の過ごし方さえ分からない。あるいはテーマを持たないから友人もできず、社会へ適応しようという意欲もわいてこない。

　菅野さんは工学研究科でしたね。今は何を勉強しているのですか。

菅野●現在、半導体などに使われている薄い膜の性質について研究しています。

保阪●その研究テーマは、自分で見つけたの？

菅野●担当の教授がもともと研究されているテーマがあって、それを応用させることで自分のテーマにしています。

保阪●能動的に学んでいるということですね。最近、有名大学の中には強制的に勉強させるところがありますね。たとえば一年次で満足のいく成績が残せなければもう一年、一年次をやらせ、それでもだめなら除籍する。あるいは高等学校のようにびっしりカリキュラムを埋めている、といった大学で、強制的に勉強をしむけて、学力をつけさせようとしています。強制しない方が私は本当の教育だと思っていますが、実は強制のない方が怖いのです。学生の自主性を尊重して、同志社大学も導入している単位互換制度などで、他大学の授業もとれるような試みが進んでいます。ですから、学びたい意志を持つ学生は伸びていくが、そうでない学生は取り残され、その差はどんどん拡大していきます。

　ある取材を通して私の父の教え子だという官僚に出会いました。父は高等学校の数学の教員でしたが、「やる気のある生徒は前に座れ、やる気のない生徒は後ろに座って、小説を読むなり自分の好きなことをしていい。ただし将来後悔しても、私のせいにしないで欲しい」と言ったそうです。受動的な“学び”を疎かにすることはできます。しかし、その責任は必ず自分が背負わなければいけないのです。父は高圧的な人だったので私は反発し、思春期の頃からほとんど会話のない冷えた関係になっていましたが、その方の話を通して、教育者としての父を少し理解できたように思います。

菅野●最後に同志社大学の後輩にメッセージをお願いします。

保阪●同志社大学は、勉強するもしないも自由です。ある意味ではぬるま湯なのですが、強制されていないがゆえの強みもあるわけで、その一つが自分で学ぼうとすればいくらでも学べるということです。この心構えこそ、新島襄の建学精神にも通じます。同志社大学の自由な環境の中で、自分を探していく、自分の時間の過ごし方を見つけていく姿勢を大切にしてほしいと思います。

菅野●ありがとうございました。

INTERVIEWER

菅野　玲子さん

【工学研究科工業化学専攻】
1年次生

工学研究科で有機・無機ハイブリッド薄膜の作成技術開発を研究。大学時代は、同志社スポーツアトム編集局に所属し、大学スポーツに熱い思いを持つ選手たちを取材する日々を過ごした。興味があることに積極的に取り組む保阪さんに、強く共感したと語る。

（学年は取材時のもの）

保阪さんの“学び”の実践は、私たちに多くのものを教えてくれる。

　学生時代の体験をまじえた保阪さんの話を聞きながら、“学び”とはどういうことなのかを改めて考えさせられました。“学び”とは、自分がもっと知りたいと感じた時に始まり、早いも遅いもないのです。その学びたいという欲求に自分自身が応えることが、能動的な生き方につながっていくのだと納得しました。「学ぶ欲求は必ず言動に表れる」という保阪さんの言葉にあるように、“学び”の本質は、生きる目標を何に求めるかに尽きると思いました。

　保阪さんは、執筆活動を通してさまざまな社会問題に取り組み、それを読者に伝えようとするとともに、もっと知りたいという‘学び’の精神を教壇から学生たちに伝えようとしているのだと感じました。

CAMPUS NEWS

京田辺市民とともに、地域通貨『きゅう』の発行をめざす！

「きっかけは、『君たち、地域通貨って知ってるか?』という郡嶌先生の言葉でした」と杉岡秀紀さん(経済学部三年次生)は語る。経済学部の郡嶌ゼミでは、当初こそ研究の一環としてだけで取り組んでいたが、各班ごとに調査を深めていくうちに、この地域通貨に無限の可能性を感じ、「それならいざ実践で」という方向に転換していったという。

Ecology と Economy と Community を引っかけ、"エコマネー"とも呼ばれるこの地域通貨は、環境の啓蒙、地域経済の振興、地域交流の活性化など、さまざまな課題を解決する可能性を秘め、今全国的に注目されているツール。これに加えて、「同大生の一部は、京田辺市の住民でありながら、ほとんどそれを意識しないで過ごしています。二年間、あるいは四年間だけの住民かもしれませんが、市民と親交を深めればもっと地域に愛着がわくだろうし、市民の皆さんもそれを望んでいるのでは」という思いもあり、導入の対象地区として選ばれた。

「京田辺を知らない、あるいは関心がないという学生を巻き込んでいきたい、という僕らの目論みはひとまず成功しました」と大野秀憲さん(経済学部二年次生)が言うように、現在の母体である『きゅう』研究会も、ゼミという枠組みを超えて広がりを見せ、今では京田辺市民を巻き込む形で、毎週の勉強会に、つねに学生四十人、地域住民十人が参加する段階に来ている。そう、郡嶌ゼミが始めた研究が、工学部や法学部生、あるいは他大学生の一部に広がり、現在においては、京田辺市の色々な団体に広まって来ているというのだ(あえて悩みの種をあげるとすれば、それは運動の中心となっている郡嶌ゼミの学生自身はすでに今出川に生活の中心を移しているということだとか——)。

三月にはエコマネー提唱者を招いた

シンポジウムを京田辺キャンパスで開催（主催は同志社大学経済学会）したり、大学生協と今後の関わり方について協議を重ねたり、と着実にプロジェクトが前進している。

最後に、杉岡さんは「皆さん、自分の〝できること、して欲しいこと〟を交換して、〝学生と学生〟〝学生と市民〟との交流について、もう一度考えて見ませんか。この地域通貨『きゅう』の発行、流通を実現するには、一、二年次生の皆さんの参加と協力が不可欠です」と、一人でも多くの参加を呼びかけている。

「書道部二人展」が明徳館ラウンジで開催される

二〇〇二年一月一五～二一日、明徳館一階ラウンジで、同志社大学書道部の小西浩太さん（商学部四年次生）と香林誠一さん（文学部社会学科社会福祉学専攻三年次生）による「書道部二人展」が開催された。

二人は書道部に所属するが、会派が違うため、知り合ったのは学内ではなく、京都市内の書道専門古書店「文苑堂書店」の店主の紹介だったと言う。

和歌山県生まれの小西さんは、高等学校時代から新古典派の書道への道を歩みはじめた。高校三年生で全日本高校大学生書道展で大賞を受賞、以来五年間連続受賞を続けている。故郷の下津町に建つ万葉歌碑の書を担当した。読売書法展、日本書芸院展に出展し、入賞を果たしてきた。

一方、香林さんは北海道出身。四歳から書道を習い始め、高校生で文化庁主催の書道展で文化連盟賞を受賞したほか、毎日書道展や創玄書道展で連続入賞、創玄書道会に属し、小西さんの古典派書道と異なり独創的な書風を追求している。

写真は左から、同志社大学書道部の小西浩太さん（商学部四年次生）、香林誠一さん（文学部社会学科社会福祉学専攻三年次生）

今回の「書道部二人展」の企画にあたって、小西さんは「良いものは良いと言ってもらえるように、親しみやすい作品を集めました」と語り、一方、書道部の幹事長を務める香林さんは「十年前は百人の部員を誇っていましたが、最近は減る傾向にあり、現在の部員は二十人。この書道展を通して、書道への関心を高めたいですね」と語る。書風は異なるが、将来も書の道を進むことを決めている二人だけに、今後の活躍に期待したい。

アフガニスタン難民を支援する音楽CD『ワタシ流イマジン』を制作

二〇〇一年九月一一日の米国同時多発テロとその後の世界の情勢は、私たちに多くの「なぜ」を投げ掛けた。その中には、ニューヨークの放送界がジョン・レノンの名曲『イマジン』の放送を自粛するというニュースもあった。今回制作されたCDマキシシングル『ワタシ流イマジン』は、そうしたさまざまな情報が流布する中、もう一度平和の意味を問い直そうと制作されたもので、平和を願うフレーズを公募し、これをベースに作詞、作曲したメッセージ音楽三曲が収録されている。

三曲のうちの一曲を本学三年次生四人で組むバンド「シカゴ・ブードル」が担当した。メンバーの一人は、「国際的な平和支援活動を行っている学生団体〝ドリーマープロジェクト実行委員会〟の呼びかけに賛同し、バンド活動で社会に貢献できるなら微力ながら協力したいと思い、参加しました」と語る。ちなみに他の二曲を演奏する〝和〟さん、加藤たかおさんも同志社大学の在学生および卒業生。

CD『ワタシ流イマジン』は、二月十三日からJEUGIA全店で発売、三月上旬からは大学生協でも発売し始めた。定価千円のうち、制作に要した経費を除く全額が、「ペシャワール会」など、アフガニスタン難民の支援活動を行っているNGOなどを通じ寄付されるという。〝小さなことから始められる平和への貢献〟――皆さんも一緒に協力してみませんか。

写真は左から、三神令嗣さん（工学部三年次生：ベース）、花沢耕太さん（経済学部三年次生：ボーカル）、山口教仁さん（法学部三年次生：ドラム）、杉岡秀紀さん（経済学部三年次生：ギター）

土佐ノ海関、大碇関。〈卒業生インタビュー〉
早春の今出川キャンパスを楽しむ

去る二月二十五日、伊勢ノ海部屋の土佐ノ海関（本名：山本敏生さん、一九九四年商学部卒）と大碇関（本名：斉藤剛さん、一九九五年商学部卒）が本学を訪れた。梅の香りが立ちこめる今出川キャンパスで、相撲部マネージャーの吉永一範さん（法学部法律学科三年次生）がお二人の近況や学生時代の思い出について話を聞いた。

写真は左から、大碇関、吉永一範さん、土佐ノ海関

吉永◆今回は大碇関の激励会に出席するための帰京とうかがっていますが、久しぶりの京都ですか。

大碇◆毎年、春場所前には後援会（後援会長：坂上守男京都新聞社会長）にこうして激励会を催していただいています。郷土とは有難いものです。昨年は、腕の怪我で大阪場所を休場しているので、今年はぜひ頑張りたいですね。

吉永◆土佐ノ海関は、今年の初場所は好調でしたね。ここ一、二年で相撲の形が変わってきたように思うのですが。

土佐ノ海◆そうですね、学生時代は、四つ相撲もとったし、投げも打ちました。大相撲界に入ってからは、突っ張り相撲を得意としていましたが、最近は言われるように、押し相撲が多くなっていますね。学生時代は、体力負けすることはほとんどありませんでしたがプロになると凄い人がいっぱいいますからね。

大碇◆学生時代は体力負けしなかったはずで、土佐ノ海関ほど大学の四年間で大きくなった人もめずらしい。卒業する頃には百三十キロを超えていたでしょう。

土佐ノ海◆入学時が九十五キロで、卒業するときには百三十五キロになっていましたね。と言っても特別なことをした記憶はない。君たちもそうだと思うけど、食生活は結構つつましかったしね。ただ、早く食べないとおいてけぼりを食らうので、がむしゃらに食べていました。

吉永◆体が大きくなって、プロになる自信がわいてきたわけですか。

土佐ノ海◆同志社大学相撲部出身では、プロの世界に入るのは服部祐児さん（元藤ノ川）以来十一年ぶりでしたから、いろいろと考えました。しかし、社会に認められるような人間になるにはどの道を進むのが一番いいかと考えたら、自然と角界に入るという結論になりました。

大碇◆私の場合は、一年先輩の土佐ノ海関が道を開いてくれていたし、学生出身の力士の活躍が注目を集めていたので、あれこれ考えることなくプロの道を選択しました。相撲部の後輩にも言っているのですが、もし意志が

あるのならその道をめざすべきです。悔いを残すより、その方がずっといい。

吉永◆プロの世界に入り環境の変化についていけましたか。たとえば、土佐ノ海関はお酒が飲めないと聞いていますが。

土佐ノ海◆関取は意外にお酒は飲まないですよ。むしろ、学生の方が飲むくらいで、その点で先輩力士とコミュニケーションがとれないということもなかった。しかし、ぶつかり稽古で「これはうかうかできない」と感じました。プロと学生ではパワーがぜんぜん違う。ただ学生横綱だというプライドがあったので、「負けられない」という気持ちで頑張りました。

大碇◆出稽古でうちの部屋に来ているので、稽古の内容は知っていると思いますが、そんなに違わないでしょう。ただその密度が違います。最近、相撲部の成績は今ひとつですよね。同志社大学は部員の数も多くないし、上下関係も他校に比べると厳しくないからファミリー的な感じがある。それが悪い方に出ていて、仲良しクラブみたいになっているのではないかと心配しているんです。私は土佐ノ海関のように高等学校時代に輝かしい実績があったわけではなく、入部当初は練習についていけるか心配でした。それでもやってこれたのは、先輩の引き上げもあったけれど、伝統に恥じないようにと高い目標を掲げてやってきたからです。

土佐ノ海◆決して今の実力に甘んじるのではなく、一ランクも二ランクも上の意識でやって欲しい。学生時代は余り意識しないと思いますが、この世界に入ると同志社大学で相撲をやってきてよかったと思いますよ。伝統の後押しというか、地方巡業に行けば必ず卒業生の方々に励ましていただけるし、それがとても力になります。

吉永◆お二人の活躍を励みに、私たちも頑張ります。今日はいいお話をありがとうございました。

”第一期生づくし“の職業人生を振り返る

写真左は編成制作局　利川祥隆さん（’99法卒）

陣原　壽明さん

テレビ朝日（全国朝日放送株式会社）事業局
プロデューサー【1979年　法学部政治学科卒業】

テレビ朝日のイベント事業部プロデューサー、陣原壽明さんは、「私は職業人として、”初めて“づくしの半生を送ってきました」と振り返る。

陣原さんが、大学を卒業したのは一九七九年。中国系日本人だったことから、当時の日本企業への就職に不安を感じ、米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校に語学留学、サンノゼ校三年次に編入の後、セントメリーズカレッジの大学院で国際経営論を学ぶ。帰国後、ヤマハ㈱に就職、輸出や開発業務に携わる。その間に、社長秘書を務めたり、中国への市場開拓プロジェクトに携

わり、北京語言学院にも留学する。自ら「いっちょかみ※ですから」と分析するように、好奇心旺盛な性格が災い(?)して、波乱万丈の人生を送ってきた。ところが陣原さんの場合はこれだけでは終わらない。ヤマハを退社後、テレビ朝日に入り、営業・企画・27時間TVを担当したと思ったら、今度は交換留学生として朝日新聞社に二年間出向、文化・スポーツイベントやフィランソロピー事業を研修。テレビ朝日にもどるとイベントを企画運営する現職が待っていた。この間、中国系日本人でヤマハに総合職採用されたのも陣原さんが初めてなら、社長秘書になったのも、テレビ朝日から朝日新聞社に出向したのもすべて陣原さんが初めてだったそうだ。陣原さんは、国禁を破って米国に渡った創立者新島襄の開拓者精神をなぞらえながら、自らが歩んだ"第一期生"のキャリアライフを誇らしく語る。

席を温める暇もないくらい目まぐるしく変化した職業人生も、ようやく落ち着きを見せ始めたようで、陣原さんの目下の関心は、母校同志社大学のこと。「京都から遠く離れた当地にも『最近の同志社大学は押され気味』という声が届くようになりました。私が入学した当時の法学部は、慶應義塾大学よりも偏差値が高かったのに、今は早慶はもちろん上智大学などの後塵を拝しているのでは?」と嘆く。「これではいけない」という思いが募り、在学中に入寮していたアーモスト館(当時)の諸兄とともに、後輩たちにエールを送る方法を鳩首協議中だという。

※なんでも口を出したがる人＝好奇心旺盛な人(関西弁)

ソルトレーク冬季五輪に本学卒業生が出場!

工藤 博さん 同和鉱業株式会社【1997年商学部卒業】

ソルトレークで行われた二〇〇二冬季オリンピックに本学卒業生の工藤博さん(同和鉱業(株)一九九七年商学部卒業)が出場した。競技種目はノルディックスキー・クロスカントリー競技クラシカル男子十五キロと五十キロ。結果は、十五キロは三十八位、五十キロは四十二位に終わったが、「実力はほぼ出しきれました」と満足そうだ。

工藤さんは、青森県の出身。小学校五年生で初めてこの競技に触れたが、中学校にスキー部がなかったため野球部で活躍し、本格的にノルディックスキーを始めたのは高校生になってからだという。同志社大学のスキー部時代には、全日本学生チャンピオンスキー大会や全日本学生スキー選手権大会で上位に入り、ユニバーシアードにも出場した。「傑出した成績を残せなかったのですが、ことあるごとに『オリンピックに出るぞ!』と周囲に言っていました。目標を持ちたかったこともありますが、そうやって自分にプレッシャーをかけていたのでしょうね」と当時を振り返る。

そんな工藤さんが少し遅咲きの花を咲かせたのは、一九九八年。初めて日本代表チームに選出され、翌九九年にはワールドカップ、二〇〇一年にはプレオリンピックに参加した。ソルトレークオリンピックの印象は、「コースも観衆も、ほかの大会とは次元が違うほど素晴らしいものでした」と語る。四年後のトリノ大会については「まだワールドカップが残っているので、それに全力投球します。四年後のことは、その後ゆっくり考えます」とのこと。最後に「無理をしてでも高いハードルを自分に課して欲しい。頑張れば、道は開けてくるものだ。たとえ結果がともなわなかったとしても、自分が納得できるということが大切です」と後輩へのメッセージで結んでくれた。

光長 功人さん

【1989年工学部機械工学科卒業】
ホームページアドレス http://www.geocities.co.jp/NeverLand/7311/

地球の反対側でボランティア〈寄稿〉

私は、今ブラジルのサンパウロ州の田舎町で、日本語を教えています。皆さんは、ブラジルというとどんなイメージを抱かれますか？サンバやカーニバルといった踊りやお祭り、ファベイラと呼ばれるスラムに代表される貧困問題などでしょうか？もし、私がブラジルについて聞かれたら、「人種デモクラシーの国」と答えます。いろいろな文化を持った人々がひとつの国を構成し、モザイクのようにそれぞれ独自の文化を主張しています。特定の肌の色や文化を持った人が中心を占めることはありません。

私は、一九九五年一二月から、国際協力事業団（JICA）が派遣する青年海外協力隊で、アフリカのザンビア共和国で物理学を二年間教えました。勉強の機会に恵まれない子供たちの役に立ちたかったからです。その後、二〇〇〇年四月から、奈良教育大学の大学院へ進学しました。日本でも、勉強の機会が十分に与えられていない子供たちがいることに気づき、「外国人児童生徒」と呼ばれている彼らについて勉強したいと思ったからです。彼らが帰国後、どのように適応しているのかを調べるために、二〇〇一年三月から六月まで、ブラジルに滞在しました。サンパウロ市郊外の小中学校で、子供たちと一緒に授業を受けながら、日本から帰国した子供たちを観察し、インタビューしていたのです。

今回は、そのとき知り合った日系三世の方の依頼で、一一月から当地で日本語を教えています。彼は、一九九一年に、日本語ができないまま日本に出稼ぎに来て、日本人にとても優しくしてもらったそうです。そして、「自分は日本人なんだ」と強く感じたそうです。三年の出稼ぎの間にお金を貯め、日本語も上手になってブラジルに帰国しました。六年前に子供が生まれ、「子供にも、ぜひ日本語と日本文化を教えたい」と強く感じていたところに、私がのこのこやってきた、というわけです。彼の一生懸命な気持ちに触れていなければ、この仕事は引き受けなかったでしょう。なにせ、ボランティアなのですから。ちなみに報酬もありません。

当初、ビザの取得も難しく、九月から教室を始める予定が遅れてしまい、果たして日本語教室が開校できるのか不安になったとき、彼が私に言った言葉があります。「誰かが始めなくてはならないのです。私たちが始めたら、誰かがついてきてくれるはずです」。この言葉を信じて、教室は始まりました。現在、生徒は、子供が二十人、大人が十人ほどいます。

教室は、日本人会館の片隅に作りました。もちろん手作りです。「あいうえお」の紙もワープロで、白抜き文字で作って、みんなで色を塗ったのです。私はこの教室に関わったために、日本で教師をする機会はしばらく延期になりそうです。二〇〇三年三月に、JICAのボランティアが送られてくるまで、この人たちに日本語を教えたいと思います。今回のボランティアは、ボランティアを呼ぶためのボランティアと言えるかもしれません。

ONE PURPOSE Library

卒業生の近刊書をご紹介します。皆さまの情報をお待ちしています。

『ベンチャースピリットの研究 ケーススタディー 三洋電機』

大富敬康さん

NTT出版　1600円（税別）

「洗剤のいらない洗濯機」で注目を集め、電池・ディスプレイ分野などでも活躍目覚ましい、今おもしろい「三洋電機」が、どのような歴史・理念・戦略に基づいて経営されているのかを探ったビジネスドキュメントとともに、ソニー、ホンダと同じく戦後の焼け野原から立ち上がった「元祖ベンチャー」伝記。今求められている「ベンチャースピリット」を経営陣や技術者への緊密な取材から導き出した著者渾身の書。

『カルロス・ゴーン 人を動かす技術』

大富敬康（本名：長田貴仁）さん（'78文卒）

日本文芸社　1300円（税別）

日産自動車社長兼CEO（最高経営責任者）である「カルロス・ゴーン」を中心に、サッカー・ワールドカップ代表監督「フィリップ・トルシエ」の二人のフレンチ・リーダーシップを分析した「ビジネス・エッセイ」。経営・経済に関しての豊富な知識と緻密な取材に加え、日本人の特質を踏まえた本書には、グローバル化が伸展する中での日本企業経営のヒントがしるされている。

ANNOUNCEMENT

※詳細はすべて掲示板等でお知らせします。

春学期

4月

フレッシュマンキャンプ

大学はみなさんの積極的な参加によって、輝きを増すところです。今回のキャンプで、同級生、先輩そして教職員と語らい、同志社大学での学生生活を有意義に送るためのきっかけをつかんでほしいと思います。

実施要項

期　　間　4月13日（土）～14日（日）
場　　所　同志社びわこリトリートセンター（滋賀県滋賀郡志賀町北小松）
募集人数　新入学生（学部生）100人※応募多数の場合は抽選
参 加 費　9,000円（宿泊費、食費、交通費〈貸切バス〉ほか）
申込期間　4月1日（月）～ 6日（土）
申 込 先　学生課窓口

ふらっと♭プログラム

今年度からスタートする多目的ホール（京田辺校地）を利用した企画です。その名も“♭ふらっとプログラム”。毎週火曜日の午後には、ふらっと多目的ホールにお立ち寄りください。春学期は映画上映会から始めますが、その後はみなさんのアイデア次第かも?請うご期待!!

場　　所　多目的ホール（京田辺校地）
時　　間　毎週火曜日12:30～・15:00～
入 場 料　無　　料
上映作品　「四月物語」「リリィ・シュシュのすべて」など。
　　詳細は本誌裏表紙を参照してください。
※今出川校地では、大学会館で“♭ふらっと会館プログラム”を実施します。

Act Together Program

@プログラム

「自然の中で思いっきり活動してみたい」「先生や仲間とじっくり話してみたい」「以前からやりたかったことをぜひ体験してみたい」―こんな思いを抱く人のための、「先生」「仲間」「体験」がキーワードのプログラムです。

昨年度は、四万十川でのリバーアドベンチャーや岡山県牛窓での黒島キャンプ、信州でのスノーアドベンチャーの3つのプログラムを実施しました。今年から一部、学生公募企画を採り入れます。4月10日（水）まで両校地の学生課で応募を受け付けています。

〈函キャン・@合同説明会〉
○5月20日（月）17時00分～（今出川校地）
○5月21日（火）17時30分～（京田辺校地）

アッセンブリーアワー

各界でご活躍の方々をお招きし、広い知識と教養を、書物や媒体を通してではなく、直接、その人柄に接して得てもらおうとの趣旨で、昨年度は、ヘアメイクアップ・アーティストの藤原美智子さん、元・F1ドライバーの片山右京さん、吉本興業の木村政雄常務らをお招きしました。

今回は下記の要領でみなさんから春学期の企画を募集します。「こんな人を呼んでみたい」という方は、学生課まで申し込んでください。

募集する企画の実施期間　4月～7月
募集締切:4月17日（水）
※所定の企画書（学生課にあり）を学生課に提出してください。
　予算は1企画5万円程度（10万円が限度）。

出会いと発見の場

函館キャンプ

函館キャンプは、同志社の創立者新島襄が1864年21歳で国禁を犯して脱国した地、北海道・函館で、“新島襄の生き方を学び、同志社を見つめ、人と人との出会いやふれあいのなか、自己を省みよう”という趣旨で行われます。参加者は教職員スタッフと共にグループを編成し、“脱国の碑”訪問、ディスカッション、フィールドワークなどのプログラムを自ら企画運営し独自のキャンプを作りあげます。過去の参加者から“学生生活最高の思い出ができた”“学部・学年を超えた友人ができた”といった声が寄せられるこの「函キャン」にあなたも参加しませんか?

実施要項

期　　間　8月19日（月）～24日（土）5泊6日※現地解散予定
場　　所　函館市青少年研修センター他
募集人数　男女各15人、計30人
参 加 費　29,000円（予定）

8月

春学期奨学生募集と学費の延納・分納について

■二〇〇二年度春学期奨学生募集
【学部】日本育英会奨学金
◎出願期間
［京田辺］
二年次生以上
四月八日(月)・九日(火)
一年次生
四月十五日(月)～十七日(水)
［今出川］四月八日(月)～十日(水)
【大学院】同志社大学大学院奨学金
日本育英会大学院奨学金
◎出願期間
［京田辺］四月八日(月)・九日(火)
［今出川］四月八日(月)～十日(水)
※三月二十二日から「奨学金出願のしおり」を厚生課奨学係で配布しています。

■学費延納・分納
◎手続き期間　四月一日(月)～二十六日(金)
※厚生課奨学係で受け付けます。学生証と印鑑を持参してください。
※期間内に学費を納入できない人は必ず手続きをしてください。

日本育英会緊急・応急採用について

失職、破産、会社の倒産、病気、死亡等または火災、風水害等による家計急変により経済的困難が継続すると見込まれる人は緊急(第一種)・応急(きぼう21)採用の対象となります。ただし、その事由が発生した時からおおむね一年以内に限ります。二〇〇一年度は四十一人(二〇〇二年二月現在)が採用されています。

医療費等援助基金について

学生のみなさんが病気になった時、例えば、大学の厚生館保健センターで受診することがあるかと思います。大学は、「同志社大学医療費等援助基金」からこの厚生館保健センターで受診した保険診療の自己負担分を補助していることをご存知ですか?つまり、無料で診察が受けられます。その他、病気やけがの治療のために通院や入院をして高額な医療費を負担した時にも保険診療の自己負担分が一カ月あたり三万円を超えた場合には、診療費の一部補助(月額二三、六〇〇円が上限)をしています。

また、学生サークルである学生保健部会が、学生の健康づくりや病気予防等のため、広報誌『ZOOM』の発行や学内での歯科検診、ヤニ検査の実施や講演会の開催など活発な活動をしています。昨年度の講演会は、大学院総合政策科学研究科の修了生であり、スポーツキャスターとしても活躍中の奥野史子さんの講演でした。

ともかく医者にかかって一カ月三万円以上現金を支払った時や何かわからないことがあれば、厚生課生活係にお問い合わせください。

学生教育研究災害傷害保険について

大学は、学生生活を全面的にバックアップするために保険料全額を大学が負担して、学生教育研究災害傷害保険に加入しています。この保険は、学生生活の中で起こった事故や災害の場合に保険金が支払われます。

事故等の主な範囲は、①講義、実験、実技など正課を履修している間、②入学式や卒業式、オリエンテーションなど学校行事に参加している間、③①および②以外で学校施設内にいる間、④大学に届け出た課外活動中です。

また、通学中(ただし、大学の禁止した通学方法の場合は適用されません。例えば、自動車通学は駄目です)や学校施設等相互の移動中の事故も保険でカバーされていますから、もしも大学への行き帰りに事故にあったらこの保険のことを思い出してください。ただし、事故が故意の場合や犯罪、無免許運転、酔っ払い運転などの時には保険金が支払われない等の条件がありますから注意してください。

要するに学生のみなさんが、学内や通学途中、キャンパス間の移動中などに事故や災害にあった場合は、すぐに厚生課生活係に連絡してください。また、厚生課の窓口には、「学生教育研究災害傷害保険のしおり」が備え付けてあります。必ず一度は読んでおいてください。

第二十五回外国文化週間

テーマ『身体とリズム』
期　間:六月二十四日(月)～二十八日(金)
場　所:京田辺キャンパス
対象者:本学学生および教職員、一般市民
入場料:無料
主　催:言語文化教育研究センター

●映画『モジュレーション』
日　時:六月二十四日(月)十三時十五分～
場　所:多目的ホール

●講演
三輪眞弘(作曲家)
日　時:六月二十五日(火)十三時十五分～
場　所:恵道館

●講演
椎名亮輔(同志社女子大学芸学部助教授)
日　時:六月二十七日(木)十三時十五分～
場　所:恵道館

●コンサート:クセナキス
日　時:六月二十八日(金)
十七時開場・十七時半開演
場　所:多目的ホール

新任教員紹介

●今年度新たに十二人の先生方をお迎えします。
①所属（学科）②職名③主な担当科目※（ ）は専攻

服部　伸
（はっとり　おさむ）
①文（文化）②助教授
③文化史基礎演習

佐伯順子
（さえき　じゅんこ）
①文（社会）②教授
③新聞学実習Ⅰ

藤本昌代
（ふじもと　まさよ）
①文（社会）②専任講師
③社会学特講Ⅰ

伊藤昌司
（いとう　しょうじ）
①法（法律）②教授
③親族法・相続法1、2

土田道夫
（つちだ　みちお）
①法（法律）②教授
③労働法1、2、3、4

北坂真一
（きたさか　しんいち）
①経済（経済）②教授
③マクロ経済理論1、2

東　良彰
（あずま　よしあき）
①経済（経済）②専任講師
③ミクロ経済学

横井和彦
（よこい　かずひこ）
①経済（経済）②助手
③（中国経済論）

四谷晃一
（よつや　こういち）
①経済（経済）②助手
③（理論経済学）

近藤弘一
（こんどう　こういち）
①工（電気工）②専任講師
③解析学Ⅰ、Ⅱ

稲葉　稔
（いなば　みのる）
①工（機能分子工）②助教授③無機応用化学Ⅰ、Ⅱ

越川弘英
（こしかわ　ひろひで）
①キリスト教文化センター
②専任講師③キリスト教学

退職教員紹介

●二〇〇二年三月三一日付で次の先生方が退職されました。

北村日出夫　文学部教授
望田幸男　文学部教授
廣川勝美　文学部教授
服部民夫　文学部教授
杉江雅彦　商学部教授
古川　功　工学部教授
山下正通　工学部教授
田淵和彦　工学部教授
田中幹也　工学部教授
梶原健司　工学部助教授（二〇〇一年九月三〇日付）
井口治夫　アメリカ研究所助教授
伊藤修三　工学部実験実習センター実験助手
中谷幸正　工学部実験実習センター実験講師（二〇〇一年一〇月三一日付）
Susanna Karoline SLIVENSKY　言語文化教育研究センター助教授

●山根学　商学部教授は、二月十三日におなくなりになりました。

証明手数料の改定について

二〇〇二年四月から英文の各種証明手数料を引き下げました。

証明書の発行については、昨年度秋学期から自動発行機を設置し、入手手続きの簡略化と即時発行を可能としサービスの向上を図ってきました。

特に英文による各種証明書の手数料は、システム化による省力化を反映し、手数料を引き下げました。

一方、卒業生の証明書は、窓口での発行であり公的機関の各種手数料も参考に応分の負担をお願いするものとして改定しました。

なお、在学生の和文証明書の手数料は、当面の間据え置きとします。

新しい各種証明手数料は左記のとおりとなりますので、在学生、卒業生の皆さんのご理解をお願いします。

●在学生

種　別		現　行　額	改　定　額
和文証明書	在学、卒業見込、修士学位取得見込、成績など	1通につき100円	1通につき100円（現行どおり）
英文証明書	在学、卒業見込、修士学位取得見込	1通につき500円	1通につき300円
	成績	1通につき1,000円	

●卒業生

種　別		現　行　額	改　定　額
和文証明書	卒業、修士学位授与、成績など	1通につき100円	1通につき300円
英文証明書	卒業、修士学位授与	1通につき500円	1通につき500円（現行どおり）
	成績	1通につき1,000円	1通につき500円

商学部
「中川優ゼミ」
3年次

疑似ミニ・プロフィットセンター（MPC）のケース研究

管理会計を学ぶ中川ゼミでは、毎週二人が発表に立ち、それについて中川先生が補足説明を行う。これを受けてゼミ生がレポートやレジメを後日提出する。「企業活動の国際化と管理会計の役割」を研究テーマに三年次では主に管理会計の基礎知識を身につけ、四年次で各自の選んだテーマをもとに卒論をまとめることになる。今回は、ゼミ生の中から有志三人に集まってもらい、世界的に注目を集めている「疑似ミニ・プロフィットセンター※（以下MPC）」と呼ばれる管理手法について木村仁亮さんの発表をもとに話し合ってもらった。

※「疑似ミニ・プロフィットセンター」…少人数の組織をカンパニーと見立てた経営管理手法で、京セラのように組織間に市場経済を導入したものを「真ミニ・プロフィットセンター」と呼ぶのに対し、市場経済を持ち込まないものを「疑似ミニ・プロフィットセンター」と呼ぶ。

中川　優
（商学部教授）

菊池　稔さん

木村仁亮さん

中林正充さん

木村●今回は、疑似MPCを実際に行っている住友電気工業株式会社（以下住友電工）のケースを取り上げていきます。住友電工では疑似MPCを「ラインカンパニー制」と呼び、工場を一つのカンパニーとし、十人前後のグループを「商店」と呼んで、遊び心を持たせています。現実の職制は、ほぼ年功序列で構成されていますが、このカンパニー制では、若手の課長や係長が社長となり現場での仕事の責任を負うことになります。

中林●責任を持たされることで、若い従業員は意欲的に仕事に取り組めるのではないでしょうか。僕は、今までの年功序列というシステムより、能力主義の方がやり甲斐につながると思います。

菊池●年長者と若い世代では、仕事に対する考え方には大きなギャップがあると考えられるので、完全に年功序列を排除するのは難しいでしょうね。「ラインカンパニー制」のような疑似的なシステムを導入することで若手従業員の反発を抑える効果も期待しているのではないでしょうか。

中川●企業の現場では変化に対する抵抗は意外に大きく、情報システムを変えるだけでも相当な抵抗を受けることを覚悟しないといけないと聞いています。とくに給与や昇進に関することとなると、直接従業員の身に降りかかってきますから、その抵抗は推して知るべしでしょう。

木村●カンパニーの場合、利益が減ったから給与が下がるということはありません。その

疑似ミニ・プロフィットセンター（MPC）のケース研究

理由として、このようなカンパニー制下ではその原因が社長の実力によるものか、社員の能力に起因するものか、あるいは偶然によるものかが判別できないし、明確な判断基準がないのに業績と報酬を結びつけると、従業員間で対立が発生しかねません。また、業績の悪いカンパニーに所属したメンバーのモチベーションの低下などさまざまな可能性を考慮して、住友電工では表彰制度や小額報奨金制度なども導入していません。

中林●確かに、配属された部署がたまたま業績が悪かったから給与が下がったりするのは困るかもしれませんね。日本の企業の場合、いろいろな部署を渡り歩いて最終的にトップになるケースがほとんどのようなので、安易に能力主義を導入するのは人材育成上も危険かもしれません。

菊池●それに欧米の場合は、一つの部署でスペシャリストとして働くので一人の力が絶対的ですが、日本ではグループ力が優先されますよね。チーム内での一人ひとりの貢献度に違いがあると、工夫して全員のモチベーションを上げていくことが必要となってきます。その場合、チームリーダーの負担が大きくなるのですが。

中川●これはしばしば指摘されることですが、米国などでは自分が社長の時に利益を多く出し、株主に受けをよくする。ただ中長期的な展望を持たないので、会社経営は長期的な成長戦略が立てづらくなるようです。

木村●そう考えると、成果主義に基づいて直接報酬と結びつけると、短期的な利益追求のみが行われ、結果的に悪い方向に行くこともあり得ることになります。カンパニーでは、月に一度、業績検討会を開催し、経営方針の整合性や損益管理、ムダの分析など、部門の壁を越えて経営改善し、業績を上げた社長に対して適切な評価を行います。この業績評価が唯一の報酬として人事評価による昇進につながるわけです。カンパニーで成果を上げたリーダーがスピード昇進できる、という認識が従業員のモチベーションアップにつながっています。また、利益を上げることばかりに固執せず、リーダーシップや人材の育成、効果的なコスト配分、ラインの見直しなど組織的な改善も可能にするのです。

菊池●改善幅を重視することで、悪い部署にいるからダメだとあきらめるのではなく、前よりどれくらい改善されたかが評価されることでさまざまな工夫も可能になるのでしょうね。

中川●現在の日本の企業では、真MPCを導入したくても、業績評価やシステムの変更などで大きな抵抗にあう可能性が高く、実際の導入はなかなか難しいでしょう。妥協案的ですが、疑似MPCを導入することで、組織内のショックを和らげながら、コスト削減や売上増大、人材育成を図ることができるわけです。先ほども話に出ましたが、日本でもだんだんと成果主義的な給与体系を望む世代が増えてきています。これからは、退職金の問題などを含めて、終身雇用制度も転換期を迎えることと思われます。今後、この疑似MPCは、日本的経営手法や組織づくり、評価システムなどに大きな影響を与えていくのではないでしょうか。

京都から発信する大学モデルの未来形

京都の夏は壮大である。祇園祭は大通りが鉾の花道となり、舞台となる。町のあちこちで地蔵盆が行われ、ミニ・シアター・コンプレックスが開業する。東と北と西の山が大きなスクリーンとなって、京都盆地が客席に変わる。入場料は無料である。しかも、そのすべてが市民の生活と密着し、必然性が組み込まれ、宗教的な意味も持つ伝統行事である。これらの行事がどうして実現し、引き継がれてきたのだろうか。これは(過去の)京都人のきっぷのよさと、ふところの深さによるものである。

同志社大学も有力メンバーの一つである大学コンソーシアム京都はそのような風土から生まれたのだろう。京都に数多くある大学が集まって、一つのバーチャル(実質的な)大学をつくろうというのだ。そこには、今後の重要な課題である社会人教育と生涯教育の種が蒔かれている。しかし、この組織はまだ十分にその力を発揮していない。今は、各大学の欠けている点を補完し合う単位互換制度や社会人教育の場であるシティカレッジなどの活動にとどまっている。私は、この組織が今後本当に一つの大学機能をもつ可能性を秘めていると考えている。それには、京都の大学人がこの組織を寛容に受け入れるだけのふところの深さをもつ必要がある。

この組織の将来に期待する私の夢を語ってみる。名前を京都広域大学と名付ける。この大学に入学という概念はない。世界中の人が学生である。授業には講義形式の授業、セミナー形式の授業の他にインターネット授業と通信講座がある。京都にあるどの大学の、どの学部の、どの講義をきくことも可能である。試験に合格すると単位が修得できる。修得した単位の数と種類によって、いろいろな種類の資格が取得できる。特定の大学や学部の修了証書は発行されない。実現には乗り越えなければならない問題点も数多くあるが、そのほとんどが私たち自身の心の中にある固定観念を変えることで克服できそうである。各大学のエゴイズムも克服する必要がある。

先日、会議のためにキャンパスプラザ京都へ行った。キャンパスプラザ京都は京都駅の西側にあり、交通の便がいい。土曜日であったが、教室では数多くの講義が行われ、廊下におかれたテーブルでは男女数人の学生たちが進化論について熱心に議論をしていた。残念ながら、このところ学生たちがこんなに熱心に学問について議論をしている場面に出会ったことはなかったので、新鮮な印象を受けた。このように、年齢・考え方・価値観の異なる人たちが集まると、議論も活発となり新しい活力やアイデアが生まれるのに違いない。このキャンパスプラザも大学コンソーシアム京都が運営する交流センターである。

受験生の減少によって、各大学は競争の時代に入り、自分の大学にいかに学生を獲得するか躍起になっている。しかし、この状況を、競争ではなくて協力で乗り越えるという方法もある。世界には数多くの人たちが、学ぶことによって夢を実現させようと努力している。貧困で学ぶことができない若者たちを、京都の大学に招待するプログラムも大学コンソーシアムなら可能となるだろう。いろいろな国のいろいろな分野で活躍する人たちと交流することにより、京都が新たな原動力を得ることも可能である。

本学教員の新刊

(総合情報センター調べ)

判例講義民事訴訟法
小林秀之 編　上北武男　佐藤鉄男　他著
悠々社　三、五〇〇円

判例講義　刑法〈Ⅰ〉総論
大谷實編　川崎友巳　他著　悠々社
二、一〇〇円

現代経済学　第二版
河合宣孝　中央経済社　三、八〇〇円

西洋思想叢書　現象学と見えないもの
庭田茂吉 著　晃洋書房　三、八〇〇円

日本企業の市場管理
光澤滋朗 著　中央経済社　二、六〇〇円

市民社会と情報変革
渡辺武達 著　第三文明社　二、五〇〇円

社会福祉と家族の経済学
岩本康志 編　浦坂純子 他著
東洋経済新報社　三、四〇〇円

ローマと地中海世界の展開
浅香正監修　中井義明　足立広明他 著
晃洋書房　二、八〇〇円

Mizushima Jiro
水島 二郎
工学部教授

1947年京都生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。相模工業大学情報工学科、和歌山大学教育学部情報科学教室を経て1992年から現職。専門は流体工学／流体物理学。著書に『パソコン画像処理』、『理工学のための応用解析学 I、II、III』などがある。

本学教員の推薦する BOOK

橋本　滋男
【神学部教授】

異質な人々を受け容れる心

「そうだ／共感してもらいたい
つながっていたい／分かり合いたい
うちとけたい／納得したい
私たちは／本当は
みな」

梨木香歩さんの新著『春になったら苺を摘みに』（新潮社）をお読みになったでしょうか。彼女が『西の魔女が死んだ』で登場したとき、それはまさに新星のデビューというべき現象でした。生と死という重いテーマの中で、不登校に陥った女子中学生が成長していく姿を描いたものです。その後、すぐれた児童文学を次々に出して数々の児童文学賞を受け、作家としての立場を確実にしました。今回の作品は彼女の初めてのノンフィクションです。この作品では彼女のこれまでの人生の歩みで得た様々な出来事や人々との交流を柔らかい感性で受け止め直し、華のある文体と豊かな表現力で提示しています。しかし、それは単に個人的な想い出を懐かしげに綴った作品ではありません。

彼女は学生時代にイギリスで生活したことがあり、そこでの下宿の女主人ウェスト夫人の人柄に触れるという貴重な経験を得ます。それから帰国後もずっと交友関係が続き、十四年後に再訪して友情を深め合うという中での多様な人間関係が作品に叙述されていきます。ウェスト夫人はキリスト教のクウェーカー派であるためか、無類の寛容さを身につけ、隣人愛を事も無げに日常的に行い得る実に希有な人物です。その下宿に押しかける人たちは、著者のようなアジア人留学生のほかに、ナイジェリアの王様の一家、結婚詐欺や窃盗を繰りかえす男、コソボ紛争で親を目の前で殺害されたイスラムの姉弟などなど、生活習慣や価値観、宗教の異なる人たちが次々に登場します。そんな人たちが同じ屋根の下に暮らすのですから、異文化接触には避けられないトラブルが起こります。そしてそれを通して著者の人間観察は深みを増していきます。ある時彼女は、パブで日本人と元英国人捕虜が戦争責任をめぐって激しい議論をしているのを見ます。そこには加害者と被害者の立場、他民族への嫌悪や偏見、謝罪要求などが応酬されるのですが、この場面を描いた後、著者は心を痛めつつ、冒頭の短い詩を掲げ、心のつながりを回復させる道を模索しています。こうして著者の経験は、今の世界をどう受け止めるかという緊急で普遍的な問題にまで高められ、あのテロとアフガニスタン爆撃後の世界をあらためて見直す視点を探し出そうとしているのです。でも爽やかな読後感でした。ぜひご一読をお薦めします。

『春になったら苺を摘みに』
梨木 香歩　著　発売元：新潮社
価格：1,300円（税別）

ハードランディングを求める日本経済
鹿野嘉昭 著　東洋経済新報社　一、八〇〇円

アメリカ文学ミレニアム1
国重純二編　林以知郎 他著　南雲堂　六、〇〇〇円

地域福祉概論
井岡勉 他　編著　学文社　二、一〇〇円

講座現代キリスト教カウンセリング
キリスト教カウンセリングとは何か
深田未来生 他　日本基督教団出版局　二、八〇〇円

郵政研究所研究叢書
金融変革の実証分析
林敏彦 他編著　鹿野嘉昭　新関三希代 他著
日本評論社　三、六〇〇円

メディア規制に対抗できるぞ！
報道評議会
浅野健一　現代人文社　九〇〇円

研究双書521
アジア中間層の生成と特質
服部民夫 他編　アジア経済研究所　三、四〇〇円

MY LIFE

「仕事」

こんなに話し上手になっていた。
英語でビジネス文書を書いていた。
卒業生を訪ね、仕事に何を求め、仕事を通して
級友の方々にとっては良き近況報告、
生活の現実を考える機会になれば幸いです。

MY JOB MY LIFE

貧困と不平等に苦しむ人々の声を開発プロジェクトに生かす。

私は、生後まもなく米国に渡り、中学生になるまでニュージャージー州で過ごしました。十三歳になり、日本語が話せないことを心配した両親に連れられて帰国。同志社国際高等学校を経て、同志社大学に入りました。大学では社会学を専攻し、卒業後は英国のケンブリッジ大学で一年、さらに国際基督教大学の大学院で二年学びました。

その後、イタリアのローマに本部のある国際農村開発基金(IFAD)に入り、発展途上国への開発支援の仕事に従事するようになりました。といっても、国際機関で働くことをめざして勉強をしてきたわけではありません。高校生の頃、世界には貧困にあえぐ人々がたくさんいることを知り、彼らと幸せを共有できるようにするにはどうすればいいのだろう、そんなことを考えて社会学を専攻、開発や行政システムについて学んできました。その間、ずっと発展途上国の人々の話を聞いたり、手助けができる仕事をしたいと願ってきました。そして出会ったのがIFADだったのです。

IFADは、飢餓や栄養失調に苦しむ農村社会を草の根の開発活動で支援しようと設立された国際基金でした。私はここで三年間勤務。アジアやアフリカのさまざまな途上国に出かけましたが、後半は希望してネパールを担当させていただきました。大学院生時代に友人の招きで訪れたことのあるこの国には、とりわけ愛着があったのです。一年半にわたってネパールを担当してみると、もっと現地の人々と触れ合いたいと考えるようになり、カトマンズに本部を置く国際総合山岳開発センター(ICIMOD)に移りました。ICIMODは、ヒマラヤ周辺の国々を対象に開発をコンサルティングする国際機関です。IFADに比べ、現地の人々と対話する機会がはるかに多い仕事で、山岳地帯の学術的な文書管理のほか、現地の人々の声なき声を集めて開発プロジェクトに反映させる使命を担っています。

バングラデシュの東端にあるチャタゴン丘陵で開発のための調査を行っているとき、先住民であるチャクマ族の首長にお会いする機会がありました。チャクマ族は、多数派民族のベンガル人に住み慣れた土地や資源を奪われ困窮のうちに暮らしていたのです。しかし、首長は言いました。「これは、われわれ種族の問題だ」と。この言葉は、改めて私たちの仕事の原点を思い起こさせてくれました。開発が彼らを豊かにするのではありません。彼らの意識が変わってこそ豊かさを手にすることができるのです。貧困からの開放は、彼ら自身が主体的に取り組むべき問題なのです。

私は来るべき時代が夢の持てるものであって欲しいと思うし、人生は夢に満ちていると信じています。でも大切なのは夢を実現するためのプロセスです。後輩の皆さんには、ぜひ高い志と広い視野を持って学生生活を送ってほしいと思います。国際社会、とくにアジアには日本の若い皆さんの力を求めている国がまだまだたくさんあるのです。

ネパールで調査中に

P R O F I L E

戸田　敦子さん

【1993年文学部社会学科社会学専攻卒業】
国際総合山岳開発センター勤務

「私の日本人としてのアイデンティティは京都で形成されました」と、戸田さんは語る。同志社大学が京都にあることで、とても充実した自由時間を過ごし、日本人としての発想を身に付けることもできたと言う。「今のプロジェクトが終わったら、しばらく仕事を離れ、ネパールでゆっくり暮らしてみたい。現地の人々と同じ物を食べ、同じ服を着て過ごすと、同じ夢が見られるかもしれない。そんなことを考えています」と結んでくれた。

シリーズ MY JOB, 第15回 私と

学生時代、とても無口だったあの人が、
学生時代、英語の苦手だったあの人が、
このシリーズは、毎号それぞれの分野で活躍する
何を考えてきたかを取材しています。
学生諸君には将来のキャリア・プランと学生

MY JOB MY LIFE

米国で出合った ニュービジネスに 無限の可能性を感じて。

同志社大学を卒業後、私は三井物産に入社し、鉄鋼部門で商社マンとしてのスタートをきるとともに、ビジネスの基礎や商社マンに不可欠なマネジメント力などをすべてここで学びました。とくに経験豊富なアシスタントがついてくれたのが大きく、私にとって格好の教育係になってくれました。

鉄鋼部門には五年間勤務しましたが、会社の中核事業にもかかわらず鉄鋼市場はすでに成熟しており、つねに刺激を求めていた私の目には次第に魅力の乏しいものに映り始めました。そこで、一般的に商社では異動することは稀なのですが、私は無理を承知で上司に頼み込み、何とか新しい職場に移らせてもらいました。新しい部署では、テレビ局の開局などに携わっていましたが、一九九七年、米国クリティカルパス社の設立に関わる縁を得ました。このCP社は、電子メールシステムの運用サービスを提供する会社でした。通常大きな企業はメールサーバを自社で持ち、専任者が社内で運用しています。しかし、これはアウトソーシングする方が経済的なことは、誰の目にも明らかです。私は、このビジネスに無限の可能性を感じました。高いセキュリティ性能、サーバのダウン対策、高速処理など、自社で運用するより遥かに経済的で快適な環境で利用できるのです。現に米国では企業の四〇％以上がアウトソーシングしています。私は、退路を断つつもりで三井物産を退社しました。現社長とともに早速日本での事業展開を準備し、二〇〇〇年五月、日本法人を設立して最高執行責任者に就任しました。

写真は左から、八木健太さん（1994年商学部卒業）、冨田忠照さん（1994年文学部卒業）、塚本さん

会社の設立にあたって、私は同志社人脈をフルに活用しました。米国本社からの技術移転には、窓口になれる英語の堪能な人材がどうしても必要だったのです。私の誘いに応えて、電通や伊藤忠商事、Excite から友人たちが駆けつけてくれ、彼らの活躍で事業は無事立ち上げることができました。市場の感触は上々。啓蒙期間を終え、後は可能性の扉を自分たちの手でどう開いていくかにかかっています。

終身雇用制度が崩壊しつつある今日、私のようにスピンアウトして新しい事業にチャレンジする人が脚光を浴びる風潮がありますが、ひとつの企業でひとつの仕事をやり抜くこともまた素晴らしいことだと思います。大切なのはしっかりしたビジネススキルを身に付けることです。私のようにコンピュータが苦手な人間でも情報系ベンチャー企業でやってこられたのも、商社時代に培ったマネジメント力があったからだと自負しています。

PROFILE

塚本　信二さん

【1993年文学部文化学科文化史学専攻卒業】
クリティカルパス・パシフィック株式会社
取締役
(http://www.cp-pacific.net)
Critical Path,Inc.
Vice President,Asia Strategeies
(http://www.cp.net)

塚本さんは、高等学校、大学とラグビーを続けてきた。そこで学んだのはチームワークの大切さだ。「社会も企業も、“個”の集まりです。その“個”が決してもたれ合わず、チームワークの下でそれぞれの力が発揮できれば、素晴らしい集団ができると思います」と語る。今後は、担当エリアも広がる予定で、塚本さんの多忙な日々は、まだしばらく続きそうだ。

お 知 ら せ
ANNOUNCEMENT

ふらっと　映画上映/2002(春学期)

【場　　所】多目的ホール(京田辺校地)　【料　　金】無料
【時　　間】毎週火曜日12:30～ 15:00～　※②⑧は15:15～

(02年度春学期企画)これ見逃した!～ 映画の現在形

オープニング上映

4月 9日(火) ①「四月物語」 98年(岩井俊二監督) 67分
12:20～ 13:45～ 15:10～

4月 23日(火) ※②「リリィ・シュシュのすべて」
01年(岩井俊二監督)146分

日本映画のバイタリティ

5月 14日(火) ③「バトル・ロワイアル」 01年(深作欣二監督)113分

5月 21日(火) ④「GO」 01年(行定勲監督)122分

追悼 日本映画界の至宝 '相米慎二'

5月 28日(火) ⑤「風花」 01年(相米慎二監督)116分

世界の映画事情～アジア／アメリカ／ヨーロッパ

6月 4日(火) ⑥「花様年華」 01年(ウォン・カーウァイ監督)98分

6月 11日(火) ⑦「初恋のきた道」 01年(チャン・イーモウ監督)99分

6月 18日(火) ※⑧「トラフィック」
01年(スティーヴン・ソダーバーグ監督)148分

6月 25日(火) ⑨「リトル・ダンサー」
01年(スティーヴン・ダルドリー監督)111分

7月 2日(火) ⑩「蝶の舌」 01年(ホセ・ルイス・クエルダ監督)95分

サマーコンサートin多目的ホールラウンジ

7月8日(月)～12日(金)　(詳細未定)

新入学生歓迎特別講演会

「余は如何にして軍事専門家となりしか　― 同志社大学で学んだこと ―」
【講　師】小川　和久氏　(国際政治・軍事アナリスト)
【日　時】4月16日(火)15:00～16:30
【場　所】京田辺校地多目的ホール　※どなたでもご自由にお入りください。

日・EUフレンドシップウィーク

欧州連合(EU)の理解を広めるための「日・EUフレンドシップウィーク」が5月に開催されます。この催しは、スポーツ、学術および文化などの交流イベントで、昨年は東京を中心に開催されました。第2回となる本年は同志社大学も参加し、EU資料センターを持つ総合情報センター主催の形でシンポジウムやパネル展示を行う予定です。詳細は決まり次第ホームページなどでお知らせいたします。

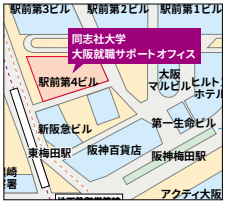
障がい学生のためのアシスタントスタッフ(有償)大募集

募集説明会・ノートテイク基礎講習会
【日　時】4月2日(火)～5日(金)15:00～16:30
【場　所】京田辺校地ラウンジ棟201会議室

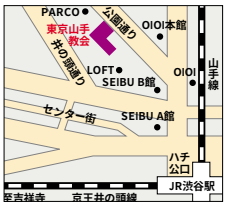
就職部からのお知らせ

学生諸君の就職活動支援のため、大阪、東京にオフィスを開設しています。パソコンでの企業情報検索および時間待ちにぜひご利用ください。

〈大　阪〉
【場　　所】大阪市北区梅田1丁目11番4
大阪駅前第4ビル3階301号
【ＴＥＬ】06－4799－3255
【開室期間】4月～7月
【開室日時】月曜日～土曜日、
10時30分～18時30分
※8月以降の開室時間については、
随時就職部ホームページ「仕事蔵」でお知らせします。
http://shushoku.doshisha.ac.jp



〈東　京〉
【場　　所】東京都渋谷区宇田川町19-5-101
同志社大学東京アカデミー内
(東京山手教会奥)
【ＴＥＬ】03－3496－3015
【開室日時】月曜日～金曜日　10時～12時、
13時～17時
土曜日　10時～12時



今出川
カウンセリングセンターが移転しました

今出川校地のカウンセリングセンターが4月、明徳館から待兵館1階北側へ移転しました。相談受付時間は以下のとおりです(電話075-251-3275)。

【月・水・金】 9:00～11:30、12:30～17:00
【火・木】 9:00～11:30、12:30～19:00
【　土　】 9:00～12:00

お便りお待ちしています

今号から『Wild Rover』と統合しました。これからも『ONE PURPOSE』は、学生・卒業生のみなさんと大学とのコミュニケーションをはかることを目的として発行します。本誌に関するご意見や企画のご提案、また悩んでいることなど、ささいなことでも結構ですので、どしどし広報課までお寄せください。

One Purpose <ワンパーパス>

同志社大学通信130号

2002年4月1日(4・6・10・12月年4回)発行

発行　同志社大学　広報課
〒602-8580　京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL. 075-251-3120　FAX.075-251-3080
E-mail ji-koho@mail.doshisha.ac.jp